

「上山城」からのたより初夏・第122号

「ハレ」の衣裳——白と黒

(公財) 上山城郷土資料館学芸員 大場浩子

かつて日本人の生活には「ハレ」と「ケ」の二つの時期があり、この二つははっきりと区別されてきました。民俗学者柳田國男により、「ハレ」は冠婚葬祭といった非日常的な行事が行われる時間や空間を指し、それ以外の日常生活が「ケ」である、という概念が提示されたのです。「ハレ」の日には「晴れ着」を着る、酒、米、魚、餅、赤飯、肉、寿司など普段食べない物を食べるなどがあげられますが、現代では近代化が進み、その区別が曖昧になつてきています。

なかでも特徴的な「ハレ」の日として婚礼と葬儀があげられます。ここではその衣裳の色について紹介します。

向かって左側の衣裳は昭和初期ごろに一般で使用さ



向かって左：婚礼衣裳、右：白装束—ナイトミュージアムより

れた婚礼衣裳で、身頃には隠れ蓑の模様が描かれています。隠れ蓑は宝尽くし文の一つで、その蓑をつければ身を隠すことができるという吉祥文です。古来より白無垢が婚礼衣裳として用いられことが多いですが、明治から昭和初期ごろは一般的に黒引き振袖が最も格式の高い色の花嫁衣裳として着用されました。最近では黒引きの振袖の人氣が復活しているようです。

右側は上市市内の旧家に伝わる白装束(袴)です。白装束というと死者に着せる衣裳を連想しますが、これは葬儀の際に喪主が着用したものです。今でこそ喪服は黒が主流のようですが、平安時代以降、白と黒が交互に繰り返されたようです。明治時代、英照皇太后(明治天皇の嫡母)の大喪の際に、明治政府によって西洋の葬祭儀礼にならい黒色とされたのがきっかけで、それ以降、黒が喪の色として一般に浸透していったと考えられます。

これまでに時代の流れあるいは制度導入により白と黒が変遷してきたことを考えると、また白と黒が入れ替わる時期がくるかもしれません。

【常設展示室から】2階第3展示室松平コーナーに桐紋鹿皮胴服、上山市指定文化財朱蓮華盆(月岡神社所蔵)等を展示します。(9月未まで)